

「幡随意上人諸国行化傳」と「祐天上人一代記」と

横山邦治

一

大本、藍地表紙、全巻五冊、漢字混り片仮名表記である「幡随意上人諸国行化傳」なる読物がある。中村幸彦先生のいわれる長編仏教説話の一つである。所見本刊記は、

○寶曆五乙亥年正月良辰

作者 京師喚替

京寺町通松原下ル町

書林

勝村治右衛門

とあるが、書林の名前は入木のあとが顕著である。中村先生所蔵の本は、この書林の名前が

○江戸日本橋通壹町目

梅村惣五郎

とあるが、これも入木のあとがある。「享保以後江戸出版書目」の

○幡随意諸国紀伝 全五冊

墨付 百九丁

同（宝曆）五亥正月

作者 喚替

板元 梅村宗五郎

卖出 同人

とあるのと同じの本とすれば、中村先生所蔵の本が初刷に近いといえようか。いずれにしても宝曆五年に出版されたもの、巻五の終りに、

○演蓮社智替白道上人幡随意大和尚

從元和元年乙卯正月五日遷神至宝曆三癸酉年歴百三十九年

南無阿彌陀仏王替妙竜

竜替高天

なる記事があるところを見ると、宝曆三年には成稿があったようである。喚替なる作者は、跋文に「洛北五劫院主喚替誌」とあるので京の僧であるが、無相文雄の序に

○一略一洛北五劫喚替上人開基三精舎^{トク}唱導^シ以誘^ル群萌^ヲ風雨寒暑^ニ孜々^{トク}四時無^ク虚日^{トク}三十年一日不^レ倦^ル俗勸^ル弊之^ヲ服編^ル醫師之行^ヲ夷^ラ或^ハ搜索^ス諸秘^ヲ録^シ或私^ニ淑^ニ諸識者^ニ靈魔神迹^ヲ不^レ載^ス悉^ク矣編成^ス題曰^ク幡随意上人諸国行化傳^{トク}一略一

とあるによって判るように、談義僧の多かつた浄土宗の知恩院の末寺である洛北五劫院に住した唱導僧の一人であつて、その暇にこの

読物を作りあげたわけで、恐らく自分自身が談義した説教をそのまま筆録したものに相違なく、典型的長編仏教説話であった。内容は、江戸幡随院の開山幡随意上人白道の一代靈験記であった。

幡随意上人の一代記については、すでに出版されたものがあった。「草保以後江戸出版書目」に

○幡随意上人行状 全一冊
墨付廿五丁

延享寅秋

作者 妙導

板元 京出雲寺和泉

売出 玉屋治郎右衛門

とあるのがそれである。未見であるが、墨付廿五丁一冊の本で、宝暦の書籍目録では「僧伝」の項に分類されて「盤桂行業記」などと一緒に扱われているから、簡略に著された行実であろう。下って文久二年の序を持つ「幡随意上人伝」二大本が出版されている。巻末に「略一又上人行化伝といふ書ありて世に流布せり。そハ京知恩寺の末寺なる。五戒院の喚着といふ人。京師にて昔より言伝へたる事等を書載たるものなり略一」という、要は「幡随意上人諸國行化伝」を簡略化して挿絵を多く挿入した寺院のPR用冊子であった。ともに文学史のうえに持ち出すべきものでないこと勿論であった。が「幡随意上人諸國行化伝」は長編仏教説話として中村先生の編まれた書目年譜(注一)に附け加えることができた。

二

江戸初期の名僧で、幡随意上人ともども、否それ以上に民衆に親

しまれた僧として、累の怪談とともに語られることで著名な祐天上人がいる。この祐天上人の行状は、実録体の写本としても広く流布しているようであるが、大よそ「近世実録全書」第八巻に収録されている「祐天上人」と大同小異であるようである。写本は所見二本に過ぎないが、ともに中村先生所蔵で、それらは「祐天大僧正御伝記」なる題名が付してあり、内容はほぼ同じい、「近世実録全書」本に比すれば祐天上人の靈験談が少く、ともに累の怪談なく、うち一本には累の話は別伝にせずとも記しているが、大筋には違いはなかった。出版されたものとしては、累の怪談として早く出版された「死靈解脱物語」二残寿元禄三年刊(本石町三丁目 山形屋吉兵衛板)は別格として、宝暦の書籍目録の「仏書雑部」に

○二 祐天名号靈験記 暮雨

とあるのが古いものであろう。未見であるが、題名から推測すれば祐天上人の説話に多く見られる名号授与から生ずる靈験談の集成であるべく、「孝感実伴録」などという靈験実話の仏書と一緒に分類されているところから見ると、いわゆる仏教長編説話とは類を異にし、民衆目当ての実話臭の強い教化談で、一方からいえば談義臭はあっても、談義僧のハンドブックにもなり得た仏教長編説話と異なる説話ではなかったかと思われる。

下って文化元年、読本の一つとして「祐天上人一代記」が出版され、次いで文化五年に「祐天大僧正利益記」三 という書が出版されている。「祐天大僧正利益記」は大本、巻末に「明頭山蔵版」とあるによって明らかであるように、一般書肆の出版でなく祐天寺が御開山の顕彰を目的に出版したもので、内容も凡例七箇条なる説明に「此記は。織田丹後侯の家臣。寺田市右衛門なる者。深く師の化導

に帰し。より／＼禪室に参認して請益せし折から。見聞する所を筆記して。自己の廢忘に備へしを。祐天寺二世。香齋祐海上人。写し留られ。同寺六世。得齋祐全上人。五三を追加せられしなり」といふように、二三人の筆録、備忘の記録の集成という性格のものであつてみれば、当然一貫した構成なく、短い勸化話の集成といふ体裁のもので、勿論これまた文学史のうえに持ち出すべきものではなかつた。ここでは「祐天上人一代記」が問題であつた。

三

「祐天上人一代記」については、すでに中村先生の論に詳細であつた(注二)が、重複を煩わず再論する。

中村先生もいわれるごとく、「祐天上人一代記」は、写本の実録として流布して来たであろう祐天上人説話を扮本としている。円通上人に弟子入の事、愚にして自殺せんとする事、円通上人祐天を勸当の事、成田山に参籠、不動明王の靈験にて智を得る事、円通上人館林善導寺へ移らるるに慕い行く事、法問にて論敵を説破して危難に遭う事、竜女の奇瑞により救わる事などなど、全て軌を一にした話であつた。がそれだけに終つてゐるのではなく、構想面で色々手を加えていた。第一に氣付くことは、祐天上人の出自についてである。実録では一般に、奥州磐城村の水呑み百姓新妻長右衛門が一子三之助を伯父久派和尚にあずけるところから始まるが、「祐天上人一代記」では、佐々木京極筆作の庶流で今は零落するも父箕作善内高員は由緒正しき家柄であることをいひ、母も上杉憲政平井の城落敗の時家司一人の女子を助け出せし此子の孫で歴家の血脈正しきをいひ、そして五十にして子なきを悲しみ成田不動に

願をかけ、満願の日、靈劍飛で腹中に入る夢を見て懐妊、出産する、一方檀通上人も仏勸により善男子の出生を知り、箕作夫婦にその子を出家さすべきことをすすめる、夫婦は武門の誓をあげさんと願つていたのでためらうが、結局出家に同意するという話が付け加わつてゐる。著名な名僧の出生に関する奇瑞談は極めてありふれたもので、何も異とするに足らず、別に拠るところありとする必要はないかも知れなかつた。がここで一応「幡随意上人諸国行化伝」を検討してみよう。

卷一卷頭は「幡随意上人誕生奇瑞ノ事」とあつて、父は川嶋七覚ノ魁ニシテ、北条家ノ嗣裔ナリとし、夫婦は子無きを愁えて熊野権現に祈願、金色ノ大熊、後ヨリ追ヒ来リ忽チ化シテ、宝珠ト成リテ懐ニ入ル夢を見て懐妊、十一才義順上人靈夢によつて沙門にせんことを乞う、家名相説をと望んでいた夫婦も結局出家に同意するといふ構成となつてゐる。十一才出家の件はむしろ実録と一致するのであるが、「祐天上人一代記」の出生談ともほぼ一致することを知る。靈験を現すものが、成田不動明王と熊野権現という相違があるが、幡随意上人の場合遷化の時も熊野権現の奇瑞があつて参照してゐると同じく、祐天上人の場合成田山参籠という場面がすでに実録にあつてみれば、成田の不動明王の奇瑞として発端の構想を立てるのは、極めて自然な着想といえた。ここでは両者相通じる構想であることをいへばよかつた。とすれば、「祐天上人一代記」の扮本の一つに「幡随意上人諸国行化伝」を用いたとしてもよからうか。しかしこの一事のみでは論拠薄弱ともいえた。

「祐天上人一代記」巻四で、暗愚であつた祐天が成田不動の靈験で叡知を取り返した後、淨念寺説法の場合潮音禪師と法問、これを

説破して三衣を奪う、それを怒った禪学の信徒が祐天の帰路を襲おうと待ち伏せる、途上祐天は竜女を濟度し、その竜女の加護により危難を逃れるという話がある。祐天の実録では、法然派を誹謗する黒流の長思なる僧のもとへ祐天が押しかけて法問、これを説破して法衣を奪う、帰途衆徒に襲撃されたとき、婦人現れ出でて「我は昔幡隨院白道和尚の十念にて、苦しみを免かれし黄誓妙竜といふ念仏守護の竜女なり、今汝の危きを見るに忍びず救ひしぞかし」（近世実録全書本）と祐天を救うのである。ここに全く唐突に幡隨意上人のことが出て来るのである。これは何を意味するのであろうか。

「幡隨意上人諸国行化伝」では、この竜女を濟度し、更にその夫をも濟度する話はむしろ中心テーマともなっており、幡隨意上人と竜女濟度の話とはもともと結びついて語られていたものであろう。

行化伝巻一で「竜女化益ノ事」の条において竜女を「王誓妙竜」の戒名を与えて濟度する、竜女は「上人在マス所ニハ、竜力ノ不思議ヲ以テ水ヲ捧テ大恩ヲ報謝セン且ツ火災ヲ払ヒ、又上人弘通ノ念仏ヲ守護セン」と約す。（こういうところから実録においても同じ念仏をもつて教化する祐天上人を救う場面への出現が連想されたかも知れなかった。）この竜女の約は「幡隨意上人諸国行化伝」全編にわたって随所で果される、例えば巻三「竜水名号請雨現証ノ事」の条で、水飢饉に雨乞の靈驗ありし話などそれであるが、巻一においても「随岩ト宥田法論ノ事」の条で法論に負けた宥田の門徒の襲撃を予告して逃れしめ、また「林泉禪寺ト問答竜神守護之豆」の条では法論、説破、奪法衣、衆徒襲撃、竜女靈驗という手順で話が進む。これまた「祐天上人一代記」と軌を一にした構想であった。実録では、祐天上人が竜女を濟度するという構想があまりに幡隨意上

人に密着した話であったので避けたのであろうが、「祐天上人一代記」では、その読本的構想を完成するために全て祐天上人の行状としてしまったのであろう。祐天上人の実録と「幡隨意上人諸国行化伝」とにおける法問と危難の話の影響関係、影響したとすればその前後関係をいま明らかにし得ないが、少くも「祐天上人一代記」は「幡隨意上人諸国行化伝」を亨けているであろうとの推測はここでも成り立った。

「祐天上人一代記」の巻五以降巻六にいたる話は、実録に見える話とは無関係のものが多いようである。巻五の「祐天師の御廻向をうけ死靈解説の事」の条も累の話ではなくて、前条から始まっている仁木十郎兵衛により殺された遊女歌川の死靈解説の話であった。

そしてそのなかに

○譬たとへ、しもふさくにおかたがうはにう田圃たのぼ生村百姓与右衛門が妻累さいりか靈魂れいこん成なり仏ぶつの事ことくわしく累かさね解説物かいげぶつかたりといふ書しよに有是等さいしんらうハ世よに普ふく知しる事也

と、実録御伝記と同じ態度を示す。

ここに見える遊女歌川の話の原拠を知らないが、仁木十郎兵衛に恋路の邪魔をされて謀殺された歌川の怨魂が、白蛇となつて現われ十郎兵衛を締め殺す話は、「幡隨意上人諸国行化伝」巻一の「釘抜名号利生の事」の「閑宿大高寺建立の事」の条に見える三谷善八の妻が妾あるを嫉妬し、死して後小蛇と化して恨みを晴さんとするが、上人の念仏廻向により成仏する話と一脈通ずるところがあった。死して蛇と変じ復讐せんという話は、「操草紙」五淡海子明和八年刊などにも見られ、一概に影響関係を論ずべきではないかも知れなかつたが。

以上「祐天上人一代記」に対して「幡隨意上人諸国行化伝」が影を落しているのではないかと思われる個々の説話について指摘してみた。しかし事はそれだけではなかった。

四

「祐天上人一代記」が色々読本の粉飾を加えるべく努めている事例は、中村先生が指摘された通りである。その読本の粉飾のうちでもっとも顕著なものは、構想面における祐天上人の敵役としての山伏竜海の設定ではあるまいか。実録の祐天上人は、累の話を除くと個々の靈験談の集成という色彩が強く、主人公の祐天上人によってわずかに一貫性を持たせているともいえたのであるが、山伏竜海の創出は、祐天上人からみ合せることによつて、構想に長編小説的骨格を与えたといえるのではあるまいか。

この竜海坊は「法力万人に勝れ周易の術に精し」というえに「時昔西国にて滅亡せし七呬燕時隆那敷因軒が妖術没那郎神の魔術を修し得て雲霧鬼と云縮精神を役ふ曲者」であつた。そして巻一から巻二において祐天の神通相を恐れて縮精神を使い愚子にする、巻二巻末において成田不動の靈験にて縮精神逃げ去つて神通相を取り戻す、巻三の河越の廢寺における妖怪騒動は、竜海とその弟子散達坊のなせる術で、祐天は散達坊の術を破り弟子となす、この散達坊は「後祐天大僧正八人の知識法脉相承の其一人淨善信達上人として勝れし徳知有し事ハ後篇にわし」という。そして巻四では竜女の話、巻五は遊女歌川の話が中心で展開、巻六前半は賤ヶ嶽の戦に死せし怨魂の怪異を祐天上人の解脱成仏せしめて尊崇を受く

る話あり（この話の原拠不明、近世実録全書所収のものには甲府様御小姓組下部数馬という旗本の話に、先祖の怨魂の祟りによる怪異靈験談があるが、影響の先後関係不明というべきか。）次いで祐天上人の法力を喜ばない島山道朝入道は、竜海を用いて祐天と法力を競わせる、祐天法力の勝利を得、此場の落着下回に分解として、

○祐天上人一代記拾遺後編六冊近日出来
という巻末広告を出して終る。

中村先生も説かれるように「七呬燕時隆那敷因軒」というのは、島原の乱の天草時貞であり森宗意軒であつて、そのもじりであつたとすれば竜海は切支丹の流れをくむ行者であつて、ここは島原の乱に思いを寄せた構想であるといえた。島原の乱の実録は数多いが、ここに影響を与えていることを証する例が見当らない。また祐天上人の実録にも、切支丹に関連する靈験談は見当らなかつた。

「幡隨意上人諸国行化伝」の巻一、「林泉寺下問答竜神守護之事」の条で、幡隨意上人が危難を受ける原因は、林泉寺は国主長尾入道謙信の先祖を葬つた菩提所で、その寺主を誦破したことについて輝虎が大いに怒つたことから生じた。富山道朝が怒つて祐天を竜海の法力で折伏せんと謀るところと一脈通じる。そして巻四の「告令ニ依テ邪宗退治ノ支」の条以降巻五に至るまでは、「蛮夷ノ凶賊九州ニ来リ、圍テ領ムケント謀リテ、邪法ヲ弘ム、種々ノ幻術ヲ以テ人ヲ惑ス、諸人ノ信ヲ究ヲ成シ、国政ヲ乱シ、現罰ヲ恐レス、甚タ平治ナリカタカリケル」状態で、評議の結果「邪党ノ信スル所ハ、蛮夷ノ邪法ニメ我國ノ仏道神道ノ類ニアラス、彼等ガ惑ヲ闢カンニハ、天下ノ高僧ニ命シテ、正法ヲ説シメ愚夫愚婦ノ心ヲ正サシメハ、当来地獄ノ苦患ヲ怖ル、心ヨリ、邪法ヲウトム

思ハ生スハシクという事で、幡随意上人を九州に派遣することになる。上人は途路靈験を現わしながら伊勢、浪華を経て海路九州に赴き、名号をもって靈験を現わしながら、やがて邪宗発頭伴夢ヲ化度シ給フ事ノの条で伴夢の幻術をくじき説破するという構想であった。

祐天上人の実録に切支丹に関する記録が皆無とすれば、「祐天上人一代記」の切支丹の流れをくむ幻術者竜海の條は、如上の「幡随意上人諸国行化伝」を模したと断じていいのではあるまいか。ことに幡随意上人と伴夢、祐天上人と竜海という対応は充分その影響をうなずかせるものであった。もっとも両者の術比べの内容は全く違っていた。「幡随意上人諸国行化伝」の術比べが、伴夢が行う鏡の幻術を上人が如来の光明で破るといふ単純なものであるに對して、「祐天上人一代記」の術比べは、恐らく「西遊記」の「八卦爐中逃大聖、五行山下定心猿」の條に見える悟空が釈迦の掌中を出ずることと不能であったという話をふまえたものらしく、竜海は神通飛行の法を行い日本の高山を經廻って祐天上人の法力と比べんとするが、祐天上人は眩惑の法を用いて竜海を庭前にうろくしと出入りするに終らしめるという話になっていた。

五

これを要するに、「祐天上人一代記」は実録の祐天上人一代記をもととして「幡随意上人諸国行化伝」を要所々々に採り込んで一代記もの読本としたものであった。ところでなぜ祐天上人の一代記へ「幡随意上人諸国行化伝」を利用することを思いついたのであろうか。一に幡随意上人も祐天上人も浄土宗の念仏を説く一種の

談義僧であった、当然その靈験談には一脈相通するものがあつたと、二にその結果両者の靈験談が混線して伝わっている痕跡もあること、実録の祐天上人一代記に「白道和尚」のことが突然出て来たり、「幡随意上人諸国行化伝」巻三ノ師ノ名号獵師ノ身代ニ立玉フ支ノの条末に一段下げて

○私曰ハタカシ祐天大僧正ノ名号、本田中務大輔家臣蜂須加因獄ナカウツカクサノタニユウケンシハヘスカヒトヤ

家来ノ難ノ身代ニ立チ玉ク支、真駒往生伝等二具也、クワイケツナンシカハリ

其ノ名号本田家添ニシヤウ、武江祐天寺ノ宝藏ニ在リ、誠コト

ニ横難ナシワシヤウツナン横疾コト横死ノ、災難アル支ナシト、奇ナル哉

という祐天上人に関する記述あり、両者の靈験談に相通するところあるを明記してあることなどからも察せられよう。三に一代記の大部分が長編仏教説話を扮本としていたこと、中村先生の論に詳細であるように(注一)江戸読本隆盛に赴くに對する上方書肆の對抗策の一つとして考え出された一代記ものの出版は、「中将姫一代記」五瀬河道人寛政十三年刊は「中将姫行状記」七釈致敬享保十五年刊に、「小野小町一代記」六堀田連山画享和二年刊は「小野小町行状記」七大江文坂明和四年刊にそれぞれを基きしているものであつて、その辺の出版事情には精通してはいたはずの河内屋太助の手を繕たものとして、編述のとき同じ仏教長編説話の一つ「幡随意上人諸国行化伝」を参考にするのは極めて自然な成行きといふべきであつたらう。しかもそれがいつところの読本の粉飾を施すために利用されているのであつて、それも長編小説の骨格を形造る構想の面に利用されているのであつたのだから、前向き利用といふべきであつたらう。読本の粉飾という、それはこの「幡随意上人諸国行化伝」を利用しての構想面におけるそれだけではなかつた。中村先生も指摘され

た中国白話小説に出てくる特長的用語を殊更に用いているのも、「忠臣水滸伝」以来の江戸読本の流行に乗じたものであった。冒頭から一二举例してみれば、

却説さかたま 將終焉まはりとき 則すなはち 的中識得ちゆうちやく 只顧ひたすら 端的てんじやく
近曾ちかごろ 迂まわりとをき 遠がってん 理會りぎ

などそれである。これだけの語句が冒頭二丁半だけに出てくるのだから、仏教的用語の々出離しゆり 罪業ざいごふ 淨土じゆつど 真門まかど 愚智ぐち 藝昧ぎまい 無量むりやう 自在じざい などが組合わされた文章そのものの殊更らしさが想像されよう。ひたすら江戸の読本作りの方法を模し、しかも一代記ものという上方で開発した読物作りの軌道の方へで、江戸の攻勢をしようとする上方書肆の努力は認めてよかつた。

六

中村先生は「祐天上人一代記」を評して、

○しかし口絵挿面は疎にしてしかも素人らしく、構成散漫にして、殆ど体をなさず、「石言遺響」や「曙草紙」に比すべくもない。

とされた。同じく仏教長編説話を扮本とした馬琴の「石言遺響」、京伝の「曙草紙」に比して、構想の拙劣はおおむねなかつただけでなく、「中将姫行状記」を文章までほとんどそのまま移した「中将姫一代記」、それに比するといかほどか読本的手法で手を加えてはいるが、まずは「中将姫一代記」の方法と大差ない「小野小町一代記」などに比しても、一読その構想の散漫であることに気付く。「中将姫一代記」にしても「小野小町一代記」にしても、創作性こそ皆無とはいえず、ある一つの完結体をもつた作品の、談義僧の

手控えとしての仏教長編説話としては必要でも読物としては無駄ともいえる部分を除いたといえるものであったから、一代記の読物としてはまとまっていたに反して、「祐天上人一代記」は一つの扮本に即くをいさぎよしとせず、少くも二つ以上の扮本を基にして新趣向の展開に努めたにかかわらず、マイナス効果しかなかつたといえよう。

文章の上でも、時の流行を追つて中国白話小説風の語句を使用しながらも、

○一切の衆生を育し愛憐し給ふ事慈母の赤子に乳房を含ることし
所願有りて上人に告奉れば卽座に痒ひ所を拙々かくと搔やうなる塩梅なれば一略一無量の善言遺ひれうぜんげん 顯けん 顯けん 其器き 〳〵に應じ
孟子の比喩を以つて諸王に示し給ひしをく歎板に釘打やうに
肌骨に破始の毒心 雖散再は眞実に帰伏なし奉り一略一
といった、八文字屋本風の俗語文脈ともいふべき痕跡をも残していた。「中将姫一代記」などと違い、文章面でもそのままの移植という露骨な模倣はしていないにもかかわらず、馬琴などの読本の文章が指向しているのとは異質なものががわれ、構想力も文章力も、江戸の新しい読本作者に比して力輔不足は覆うべくもなかつた。

世評の香ばしくもないことも当然予想され、後編の予告を巻末に

○祐天上人一代記拾遺後編六冊近日出来

前編に載し山伏さんぶく 竜海りゆうかい 妖術ようじゆつ を以て法力をあらそひしに、
く上人に折れ夫それ種々の妖精を役せしはに究に御徳に
飯依し竜海の文字を改め了戒坊と名のり浄土宗の談議僧
となり諸國を普く勧化す博学能弁なりしハ近松門左衛

門が宵庚申の謡曲にも見へし如く其頃の名僧にて竟に曉
菅了戒上人とて八英の御弟子の最一たりし語其外名号御
十念の靈験ふしき奇蹟いろく珍しき事を載

と、相当詳細な内容説明までして後編發刊の意欲充分であるにかかわらず、ついにその姿を現今見ることができなかった。もっともこの予告によれば、「祐天上人一代記」の後編は、拾遺の名が示すように祐天上人だけでなく、八英の弟子が活躍し、なかでも了戒坊・信達坊がそれぞれからんで構想のあやをなし、それらが諸国廻りしての勸化靈験談を集成するという形をとるものであったらしいから「南総里見八大伝」を作った馬琴のような構想力を持った作者なら別として、展開期読本として期待できるようなものではなかったであらう。

七

仏教長編説話が展開期読本に影響している様相については中村先生をはじめとして種々指摘されているが（注三）、以上のように見ると「中将姫一代記」以降上方書肆が関与してきた一代記ものには、終始一貫強い影響を与え続けていたことが判った。

と同時に、仏教長編説話の物語構成の骨法を、「續像石言遺響」

五曲亭馬琴 文化元年刊、さらに「刈萱後伝玉穂奇」三曲亭馬琴 葛飾北斎画 文化四年刊

の創作を経て自分自身のものにした馬琴は、「新景解脱物語」五曲亭馬琴 葛飾北斎画 文化四年刊（「死靈解脱物語」を題材として

いて、仏教長編説話と同題材とはいえないが、河内屋太助の依頼に

よって執筆したという事情から考えて、祐天上人に関与した物語であることもあって、いかほどか仏教長編説話と関係した作品といつてよからう。）「敵討裏見葛葉」五曲亭馬琴 葛飾北斎画 文化四年刊（「信田

白狐伝」五釈誓誓堂曆七年刊 と同題材「墨田川梅柳新書」六曲亭馬琴 北斎画 文化四年刊（「隅田川鏡池伝」西向庵春帳 遊川春信画 宝曆四年刊 と同題

材）といった仏教長編説話のなかにも見られる同じ題材のものを扱いなながらも、ほとんどその影響を感じさせないほどに脱化した新しい読本造りの方法を確立していった、その馬琴に代表される江戸読本作者を擁する江戸書肆のまえには、「祐天上人一代記」程度の読本しか作り出せなかった上方書肆は、その劣勢を認めざるを得なかったであらう。所説有力な作者を育て得なかった上方書肆は、絵本などの安易な読本作りに進まざるを得なかったのである。

しかし「梅若丸一代記」五八文字自笑 天明八年刊（都島妻恋笛」

五享保十九年刊 の改題再板「俊徳丸一代記」五八文字自笑 天明八年刊（富士浅間握野桜」五享保十五年刊 の改題再板）という八文字

屋本の読本化をはじめとして「祐天上人一代記」に至るまでの上方書肆が切り開いてきた一代記ものの系列は、決してそれだけで跡を断ったではなかった。

出版は文化四年であるが、「近世物之本江戸作者部類」によれば、

○此年（文化二年）の冬、四天王剽盜異録、前後拾巻を創す、

（豊国画、柏屋半兵衛板）三圍一夜物語、（豊国画、上総屋忠助板、）水滸画伝、（第十回まで、二帙十一卷、北齋画、角丸屋

甚助、前川屋弥兵衛合刻、椿説弓張月前編六卷、(北斎画、林屋庄五郎板、)等の読本を作る、又盆石皿山の記前編二卷、(中本也、豊広画、住吉屋庄五郎板、)敵討誰也行燈二卷、(中本、豊国画、鶴屋金助板、)二種の作あり、

と、半紙本、中本という体裁のうえからだけでなく、内容的にも様々の方法をもって多角的に読本を作り出していた文化二年、後年やがて稗史もの読本の中心的地位を占める続きもの読本の初作ともいえた(注四)「椿説弓張月」を馬琴は執筆している。題名の角書に「為朝外伝」とあるによつても判るよつに、馬琴の創作意識が為朝の一代記を創るということがあつたとすれば、上方の一代記もの路線を、意識するにせよしないにせよ継承したといえるのである。河内屋太助から「死霊解脱物語」を送られて新作を依頼されている馬琴は、一代記ものをめぐる上方書肆の動向は十分承知していたはずであつた。そして馬琴の文化二年における多角的試みの中から、この「椿説弓張月」の好評によつて定着した続きもの読本の系列が、やがて読本の主流となつていったのであるから、上方書肆の一代記もの開発の意義もまた少しとしないのである。と同時にその一代記ものの基ともなつた長編仏教説話存在の意義も認めざるを得ないであらう。

注一・中村幸彦先生「近世小説史の研究」所収「読本の發生に關する諸問題」参照。

注二・中村幸彦先生「近世小説史の研究」所収「読本展回史の一齣」参照。なお「祐天上人一代記」は年表に掲げてないので、中村先生蔵本によつて刊記を著しておく。

○享和四年甲子年正月吉辰

新通り三丁目
南紀書林
總田屋平右衛門
押小路通御幸町角
皇都書林
伯馬屋太兵衛
寺町二条下八町
鉛屋安兵衛

浪華書林
なお年表に、刊年も著者も不明の部に、
○祐天上人一代図会六
御幸町御池下ル町
菱屋孫兵衛
心斎橋通唐物町
河内屋太助

というのが見える。未見。六という冊数が図会ものとしては半端だから、あるいは「祐天上人一代記」と同じものであつたかも知れないが、図会なる名称にこだわれば、幕末期に出版された一連の図会ものと同種のものかも知れなかつた。

注三・中村幸彦先生「近世作家研究」所収「『桜姫伝』と『曙草紙』」、
「近世小説史の研究」所収「読本發生に關する諸問題」参照。後藤丹治著「太平記の研究」三二六頁にも「小夜中山靈鐘記」と「石言遺響」についての論あり、拙稿「上方読本展開の側面―仏教長編説話ものの継承をめぐって―」(近世文芸稿6)「景清句当議略伝」と「景清外伝」と(近世文芸稿12)にも少しくふれている。

注四・拙稿「続きもの読本の一様相―上方読本の流れにそつて―」(広島大学文学部紀要第二十七卷一号)参照。

○本論は瑣事について冗舌がすぎたが、全ての面で中村幸彦先生の論に導かれたもの多く、御所蔵の本を利用していただいたこととともども、深く学恩を謝すと同時に、先生の論をけがすことをおそれる。